

カリキュラム・ポリシー(教育課程方針)

茨城キリスト教大学は、別に定める学位授与方針に基づき、全学教養課程、各学科・専攻における専門課程を次の方針により編成します。

全学教養課程

本学は、各学科・専攻において別に定める学位授与方針をふまえ、全学部学生が共通して学ぶ全学教養課程を次の方針に従って編成します。

<方法と理念>

すべての学生の人間的成長を促し、もって次代の創造に参画するよき市民の育成をめざします。

キリスト教の精神に基づいた全人格的教育の展開を通して、現代社会において自立した個人として、またよき隣人として、自他を尊び「共に生きる」精神を育みます。

自然ならびに人間社会に対する畏敬をもって調和と共生を図るために自ら行動することができる人物の育成をめざします。あわせて、心身の健康に関心を持ち、その促進のために科学的視点をもって行動することができる人物の育成をめざします。

充実したリテラシー教育の展開とともに、自然、歴史、地域社会、先人の知恵とあわせて現代科学におけるさまざまな知見に学ぶ機会を提供することにより、高度情報社会をしなやかに生きるバランス感覚と行動力に優れた人物を育みます。

世界の多様性の認識と異文化への理解を深めるとともに、自身の言語と文化を尊び継承し発展させることができる人物の育成をめざします。

言語や文化の異なる人々とのさまざまな交流や共同体験を通して、たがいの文化を尊重しつつ人類社会の成員として共生していくための開かれた精神と幅広い視野を備えた人物を育みます。

教養ある専門職従事者の育成に積極的に貢献します。教養ある人格こそがその専門性を高めるとの観点にたち、それぞれの学部・学科・専攻においてめざされている専門性を支え、それを広げ、活かすために不可欠なものとして教養教育を位置づけます。また優れた専門性は、教養ある人物から紡ぎだされるものであるとの観点にたち、すべての年次において教養教育と専門教育を有機的に配置し、相互の関連性と統合性を重視したカリキュラム展開を図ります。

全学に学ぶ学生同士の積極的な交流を通して、自らの専門性を相対化して捉える視点を養うとともに、将来、他分野との協働を通して人類福祉のために積極的に貢献することができる人物を育みます。

<分野>

建学の精神、人文、社会、自然、外国語、健康スポーツ、留学、ICT、総合演習、特別授業の計10分野(科目区分)で構成します。

<年次>

多様な興味・関心や履修希望時期の個人差、進度・編成の異なる各学科専門科目との適切な連携等に対応するため、大半の科目については1年次から履修可能となるよう編成します。

<評価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

文学部

現代英語学科

現代英語学科は、別に定める学位授与方針に基づき、学科専門科目について次の方針に従って教育課程を編成します。

<方法と理念>

習熟度別クラス編成により、実践的な英語の技能を身につけることのできるスキル科目群を編成し、履修者自身が予習や復習をもってその深化を図ることを同時に支援します。また特に演習科目や実技・実習科目では、グループ・ディスカッションやプレゼンテーション等のアクティブ・ラーニングをふんだんに取り入れて知識・技能の習熟を図るとともに、同世代の英語母語話者(インターン生)等の異なる文化背景を有する人々と英語を使って積極的に関わり、課題解決に主体的に向き合う態度や思考力・判断力・表現力の育成を図ります。また、そうした学修を補完しながら実践的ボランティアや公正性を身につけるための活動として、地域・国際交流センターのバディとして留学生を支援したり、日本語を教えたりするボランティア等を各授業を通じて推奨します。

<分野>

英語を専攻する者として必要な知識を学び、国際社会における英語の役割を理解し、英語圏以外の文化に対しても広い視野と公平さを身につけることを目的とした「現代英語基礎演習Ⅰ」「現代英語基礎演習Ⅱ」を設置します。

<年 次>

1、2年次には、英語の「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能および非言語コミュニケーション技能の伸長をめざし、実用的なレベルの英語運用能力を身につけるための必修科目を配置します。3、4年次には、グローバル化社会を生き抜く職業人に必要なスキルと教養を身につけるための選択科目を「グローバル・コミュニケーション」「ホスピタリティ」「言語教育」「言語と文化」「演習」「アクティブ・ラーニング」の各分野に幅広く設置します。

<評 価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

英語圏の文学・歴史・文化について研究し、「生きる意味とは」「幸福とは」など、人のもつ根本的な問いについての答えを探求し、その過程で人間としての成長を図ります。

児童教育学科

児童教育学科は、別に定める学位授与方針に基づき、学科専門科目について次の方針に従って教育課程を編成します。

児童教育専攻

<方法と理念>

わかり易い資料に基づく解説等により基本的な知識・技能を身につけることのできる講義群を編成し、履修者自身が予習や復習をもってその深化を図ることを同時に支援します。また特に演習科目や実技・実習科目では、グループ・ディスカッションやプレゼンテーション、模擬授業や場面指導等のアクティブ・ラーニングをふんだんに取り入れて知識・技能の習熟を図るとともに、課題解決に主体的に向き合う態度や思考力・判断力・表現力の育成を図ります。また、そうした学修を補完しながら実践的ボランティアや公正性を身につけるための活動として、こども達に実際に関わる教育ボランティア等を各授業を通じて推奨します。

<分 野>

教育学・教育心理学・児童学に関わる科目群を知識修得の基礎分野として設定し、その周囲に学術的関連科目群や特別支援教育、音楽・美術・体育・労作体験などの実技科目群をふんだんに配置することで、知識・技能の拡大と深化、思考力・判断力・表現力の醸成、学修に主体的に取り組む態度の育成を図ります。特に3年次の初等教育実習や、3・4年次の児童教育演習(ゼミ)では、上記諸能力の総体を確認しながら更なる深化に務め、もって「頭と心と身体」をバランスよく鍛える教育課程を展開します。

<年 次>

学科専門科目は教養科目との融合を図りつつ、1年次は基幹及び関連科目課程、2年次は初等教育課程、3年次は初等教育及び特別支援教育課程、4年次は専門領域研究・実践課程を置くことを基本として構成します。

<評 価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

4年間を通して「IC教職履修カルテ」の各評価シートに基づき、具体的・効果的且つ実践的に学修成果を把握し、教職をめざして学修を重ねていくことで、何を学んだのかを振り返り、今後の課題を明らかにして行動化するための手がかりを得ることを支援します。

幼児保育専攻

<方法と理念>

わかり易い資料に基づく解説等により基本的な知識・技能を身につけることのできる講義群を編成し、履修者自身が予習や復習をもってその深化を図ることを同時に支援します。また特に演習科目や実技・実習科目では、グループディスカッションやロールプレイ、保育教材を用いたプレゼンテーション、指導案に基づく場面指導等のアクティブ・ラーニングをふんだんに取り入れて知識・技能の習熟を図るとともに、こども理解を深め、課題解決に主体的に向き合う態度や思考力・判断力・表現力の育成を図ります。また、そうした学修を補完しながら実践の中で学ぶ力や公正性を身につけるため、こども達に関わる保育ボランティアや学園内附属こども園での研修等を推奨します。

<分野>

保育学・保育心理学・子育て支援に関わる科目群を知識修得の基礎分野として設定し、その周囲に学術的関連科目群や、音楽・美術・体育・労作体験などの実技科目群をふんだんに配置することで、知識・技能の拡大と深化、思考力・判断力・表現力の醸成、学修に主体的に取り組む態度の育成を図ります。特に2年次の初等教育実習(幼稚園)や3、4年で行う保育実習(保育所・施設)では、実習後の大学での振り返りを行いPDCAサイクルの中で上記諸能力の総体を確認しながら更なる深化に務めると同時に、自らのこども観を問い直し「頭と心と身体」をバランスよく鍛える教育課程を展開します。

<年次>

学科専門科目は教養科目との融合を図りつつ、1年次は基幹及び関連科目、2年次は保育内容研究科目、3年次は障害児保育や子育て支援科目、4年次は専門領域研究・実践科目を置くことを基本として構成します。

<評価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

4年間を通して「IC教職履修カルテ」の各評価シートに基づき、具体的・効果的且つ実践的に学修成果を把握し、教職や保育職をめざして学修を重ねていくことで、何を学んだのかを振り返り、自らの子ども観を構築し、人間理解を深め、今後の課題を明らかにして行動化するための手がかりを得ることを支援します。

文化交流学科

文化交流学科は、別に定める学位授与方針に基づき、学科専門科目について次の方針に従って教育課程を編成します。

<方法と理念>

文化交流に関する基本知識やスキルを身につけることのできる講義群を編成し、履修者自身が予習や復習をもってその深化を図ることを同時に支援します。また、演習科目や実技・実習科目では、「文化交流体験」「多文化協働演習」「地域貢献演習」などのアクティブ・ラーニングをふんだんに取り入れて知識・技能の習熟を図るとともに、課題解決に主体的に向き合う態度や思考力・判断力・表現力の育成を図ります。また、そうした学修を補完しながら実践的ボランティアや公正性を身につけるための活動として、地域貢献や異文化交流等を各授業を通じて推奨します。

<分野>

文化交流を学習するために必要な基礎科目群を設定したうえで、応用科目として多文化協働、観光、地域貢献、日本語教育に関する一連の講義や演習科目を配置し、知識・技能の拡大と深化、思考力・判断力・表現力の醸成、学修に主体的に取り組む態度の育成を図ります。特に3～4年次の文化論演習(ゼミ)では、上記諸能力の総体を確認しながら更なる深化に務め、もって「頭と心と身体」をバランスよく鍛える教育課程を展開します。

<年次>

学科専門科目は教養科目との融合を図りつつ、1～2年次では文化交流に関する基礎的科目、3～4年次は専門領域研究・実践課程を置くことを基本として構成します。また、4年間を通して、アジア・欧米などの諸地域の文化に関する一連の知識・技能を習得します。

<評価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

学修成果の評価は、各科目のシラバスにおける授業の到達目標に照らし合わせ、成績評価の方法・基準に合わせて適切に行います。また、国内外でのフィールドワークやアクティブ・ラーニングに関する評価は、当該活動で課している報告書等で評価し、学科独自のニュース・レターでその成果を学内外に発表していきます。

生活科学部

心理福祉学科

<方法と理念>

わかり易い資料に基づく解説等により基本的な知識・技能を身につけることのできる講義群を編成し、履修者自身が予習や復習をもってその深化を図ることを同時に支援します。また特に演習や実習科目では、グループ・ディスカッションやロールプレイ、プレゼンテーション等のアクティブ・ラーニングを取り入れて知識・技能の習熟を図るとともに、課題解決に主体的に向き合う態度や思考力・判断力・表現力の育成を図ります。また、そうした学修を補完しながら実践的ボランティアや公正性を身につけるための活動として、心理・福祉に関わるフィールドワークやボランティアなどを各授業を通じて推奨します。

<分野>

心理学・社会福祉学に関わる科目群を知識修得の基礎分野として設定し、演習・実習・実験などの実技科目群を配置することで、知識・技能の拡大と深化、思考力・判断力・表現力の醸成、学修に主体的に取り組む態度の育成を図ります。特に3年次の心理実習・心理学実験やソーシャルワーク実習、3・4年次の心理福祉演習(ゼミ)では、上記諸能力の総体を確認しながら更なる深化に務め、もって「頭と心と身体」をバランスよく鍛える教育課程を展開します。

<年次>

1年次は教養科目・基幹科目を中心とした基礎課程、2年次は心理カウンセリング系科目・福祉系科目の専門科目の中でも基礎的な科目を中心とした専門基礎課程、3年次はより専門的科目や実習・実験を中心とした専門応用課程、4年次は専門領域研究・実践課程を置くことを基本として構成します。

<評価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

心理学系については、学部において公認心理師国家資格の取得に必要とされる講義・演習・実習科目を4年間にバランス良く配置し、心理学に関する専門的知識及び技術の習得を支援します。

社会福祉学系については、社会福祉士国家資格の取得に必要とされる講義・演習・実習科目を4年間にバランス良く配置し、少人数による指導によって社会福祉士として求められるソーシャルワークの知識・技術・価値観の修得を支援します。

食物健康科学科

食物健康科学科は、別に定める学位授与方針に基づき、学科専門科目について次の方針に従って教育課程を編成します。

<方法と理念>

食物健康科学に関連する幅広い知識と専門性ならびに管理栄養士、栄養士、食品衛生監視員、栄養教諭、家庭科教諭等の専門職業人に必要な適性や知識・技能を身につけるための課程を講義、実験・実習、演習により編成します。特に、講義科目においては、学生参加型学習、グループ学習など双方向型の教育方法を通して、主体的・能動的な学修態度を育みます。実験・実習科目においては、多様な形態のグループ学習を通して、コミュニケーション能力ならびに思考力・判断力・表現力の育成を図ります。また、そうした学修を補完しながら実践的ボランティアや公正性を身につけるための活動として、人々の健康づくりや食育に関わるボランティア等を各授業を通じて推奨します。

<分野>

食物健康科学への興味・関心の醸成ならびに専門性の土台となる食と健康にかかわる基礎知識修得のための科目群を専門基礎分野として設定します。専門基礎科目の学修をふまえ、さらに人々の健康づくりを担う専門職に必要な知識・技能の拡大と深化、思考力・判断力・表現力の醸成、主体的に学修に取り組む態度の育成を図るための科目群を専門分野として設定します。

また、科学的・論理的な思考および総合力を養うために、卒業研究を設定します。

<年次>

学科専門科目は初年次教育科目、教養科目との融合を図りつつ、1、2年次は専門基礎分野の関連科目課程、2～4年次は専門分野の関連科目課程、4年次は専門領域研究、管理栄養士国家試験対策の課程を置くことを基本として構成します。

<評価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

個人毎に履修系統図に基く学修計画を作成し、アセスメントテスト、学修ポートフォリオの結果等を踏まえて自己評価を行ない、課題の明確化や行動目標の設定・実施が円滑に進むよう支援します。

看護学部

看護学科

看護学科は、別に定める学位授与方針に基づき、学科科目について次の方針に従って教育課程を編成します。

<方法と理念>

看護学科では、人々の「よき生」を支え育むことに寄与する「知恵」をもった下記の6つの力をもつ看護に携わる人財を育むよう支援します。

1. 高い倫理性に基づき、公正に判断し、行動する力
2. 看護の対象となる人を深く理解し、全人的にとらえる力
3. 看護の対象となる人と、よりよい援助関係を形成する力
4. 論理的思考力と柔軟な創造力をもって看護を考え、的確に判断し実践する力
5. 他者と協働しながら、責任をもって、看護を実践する力
6. 主体的に学修に取り組み、生涯にわたって自己研鑽し続ける力

これらの力を修得できる課程を、全学教養科目・専門基礎科目・専門科目から編成し、講義・演習・実習の授業形態により展開します。特に、学生が確かな専門的知識に基づく思考力と実践力を、体験に基づき修得することを重視します。そのため、講義・演習・実習のすべてにおいて、学修の主体である学生が能動的に学修するためのしくみや工夫を取り入れ、それらを通じて豊かな看護観を育むよう支援します。

<分 野>

建学の精神であるキリスト教精神や、人文・科学・自然のすべての側面から豊かな人間性を育む「教養」を基盤とし、看護を思考し実践する力を育みます。1年次には、看護学の学修を始めるにあたり必要なアカデミックスキルの修得に特化した科目を設置します。看護学を学ぶ基礎となる人体のしくみや疾病の成り立ち、健康を取り巻く環境をはじめとする看護の基本概念に関する科目を配置し、看護の対象となる人を生活者の視点から全人的にとらえる演習・実習科目を配置します。また各年次に段階的に、基本的かつ専門的知識に基づき、看護をより実践的に思考する演習・実習科目を配置します。1年次から4年次までのすべての学年において、地域の多様な場における実習科目を配置し、実践のなかで看護を深く思考し実践する力を育みます。なかでも本学の使命と地域的な特性を活かして、複数の倫理性を育む科目、放射線災害を含めた災害に関する科目をはじめ、県北・県央地域における人々の健康と暮らしに基づく看護を、体験を通じて学修する科目を設置しています。

<年 次>

学科専門科目は、教養科目との融合を図りつつ、上述した6つの力を体系的かつ段階的に育むことができるよう、1・2年次では専門基礎科目、2年次では看護学の基本と看護展開の基礎、3年次では看護展開の応用、4年次では看護学の発展に関する科目を配置し、学びを積み重ねていく構成としています。

また、自らの関心を深め、自律的・能動的に学修する態度を育成し、生涯にわたって学修する動機づけを図るため、すべての学年において多様な選択科目と卒業年度には研究方法論、総合実習を配置しています。

<評 価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。特に、臨地実習前後や卒業時に計画されている客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination:OSCE)、研究方法論演習Ⅰ・Ⅱ、総合実習の学修過程と成果によって、到達目標の達成を確認します。

<その他>

看護の専門職として地域で社会貢献できる人財の育成をめざし、看護師国家試験受験資格に加えて、保健師国家試験受験資格(選抜制)や養護教諭一種免許状を取得できるカリキュラムを編成しています。

経営学部

経営学科

経営学科は、別に定める学位授与方針に基づき、学科専門科目について次の方針に従って教育課程を編成します。

<方法と理念>

経営学科では「豊かな教養と専門性を備えた人材の育成」を念頭に、学問的素養を高め、経営学の各々の専門分野での知識や技能を育む一方、広く社会のニーズに合致するため、対人能力や問題解決能力に優れた資質を持つ人材の育成を重視しています。そのため講義形式の授業に加えて、グループワークを多く取り入れた演習授業を初年度から行い、リーダーシップ力を養う参加型の実践教育を活用します。卒業後は民間企業や公的機関等で活躍し、将来、国際社会や地域社会に広く貢献できる質の高い人材の育成を目指しています。

社会に必要な知識・能力においては、

①一般教養と倫理性(基礎学力・社会常識、倫理観と豊かな人間性の醸成)

②専門的知識・スキル・分析能力

③意思決定、リーダーシップに関わる総合的能力(コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、問題解決能力)

が重要であると考え、それらをバランスよく修得できる履修科目の編成を施しています。

<分 野>

経営学における基幹科目のうち、経営学入門およびリーダーシップ演習を基本的な知識および社会人基礎力養成のための基礎分野として設定し、専門基礎科目における科目群を配置することで、知識・技能の拡大と深化、公正な判断力・豊かな表現力の醸成、学修に主体的に取り組む態度の育成を図ります。同時に、マネジメント、会計・ファイナンス、地域イノベーションの3分野の専門科目群が、専門知識と問題解決能力、行動力を備えた優れた専門性を備えた社会人としての能力を育成します。特に3・4年次からの必修科目である経営演習(ゼミ)では、上記諸能力を高めながら統合できる力を発揮できるように体験的学習にも努め、社会のビジネスリーダーとしてふさわしい能力を養う教育課程を展開します。

<年 次>

1～2年次においては、基礎的な能力を高めるために、入門科目とともに演習科目を必修とし、上記②、③の能力を育成するとともに、専門科目では、マネジメント、会計・ファイナンス、地域イノベーションの3分野を中心に、学生の将来の進路に応じた必要科目を年度別、段階的に選択できるように配置しています。3、4年次には経営演習ゼミナールによって、指導教員の下で更に自らの専門性を磨く密度の高い教育を行います。評価においてはGPA制度による公正かつ客観的な運用に努め、「学生が何を身に付けたか」を重視して学生の進級判定、卒業認定、学修支援を行います。

また、今日求められている地域社会に貢献する人材とグローバル社会で活躍する人材の育成を主眼として、専門科目に両系統(グローバルと地域)に関する充実した選択科目群(プログラム)を設置し、履修条件を満たした学生には修了認定を与えるグローバルビジネス・プログラムと地域マネジメント・プログラムを取り入れています。

<評 価>

学修成果の評価は、学位授与方針に掲げる各項目(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学修に主体的に取り組む態度、実践的ボランティア、公正性)をふまえた各科目の到達目標、評価方法、評価基準に基づき適正に行います。その詳細については各科目の授業概要(シラバス)に記載します。

<その他>

経営学科では、将来、地域社会や国際社会で活躍できる質の高い人材育成を目指しており、単なる知識や技能習得だけでなく、地域の連携の中で活動し、実践的ボランティアリズムをはじめとして学生が主体的かつ実践的に取り組めるような外部との交流、意見交換、実施体験のできる機会を授業に取り入れるように努める。